

## 5-3 技術力で苦情を解決！ 地元との友好的関係で円滑に施工

### 1. 立場と仕事

建設会社に入社し、都市土木を主として国内外の現場を数多く経験した。主要幹線道路拡幅事業における工事の現場代理人として、付帯設備他を昼夜で建設した。

### 2. 遭遇した事態

当該工区は閑静な住宅街に隣接しており、かつ事業に対する反対する住民が多い地域であった。現地に乗りに込んだ時には、すでに事業反対の横断幕が掲示されており、すでに着工している近隣工区が設置した路面覆工の騒音がひどいとの苦情が発注者に寄せられていた。そのため、工事着手前の沿道説明会を開催した際に、地元住民から“近隣工事と同レベルの騒音が発生するようであれば工事をさせない”と言われた。

設計通りに路面覆工を設置すれば近隣工事と同レベルの騒音が発生するのは確実で、円滑に工事を進めるためにはなんらかの対策が必要であった。

おりしも、受注後に工事計画の変更があり、工事目的物を再設計することとなったため、工事着手時期が1年間延期となった。

### 3. 対応内容とその結果

工事を円滑に進めるためには騒音対策が最優先事項であると判断し、着手延期となった1年間で『静かな覆工板』の開発に取り組んだ。業界初の試みで完成する確証はなく、また、発注者から指示されたわけでもないので開発費用の回収は難しいと考えられたが、積極的な試みは職員の意識向上にもつながり、必ずどこかで生きてくると考えた。「車両が通行した際に発生する覆工板のバタつきと騒音発生」の原因を解明し、どう解消するか検討した。覆工板に防振塗料を塗布し、バタつきを防止するためにサイズアップすることとした。しかし、覆工板はリース品であるため、規格品以外を製作することは難しく、かつ現地で溶接により連結するとすぐに溶接部が破断する可能性があるのと復旧費用が高額となるため、覆工板同士をボルトで連結することとした。一部分を設置したところ、初めは静かであったが、内部のボルトがはずれてカタカタと音が鳴り始めて覆工板に段差ができたため、地元住民や発注者に酷評された。そこで、現場の職員、技能労働者で意見を出し合い、協力会社の職長がインターネットで「緩まないボルト」を探し出した。結果、騒音を通常のアスファルト舗装と変わらない程度まで低減することができた。

これにより、工事期間中に地元住民から苦情がくることはほとんどなかった。くわえて、地元住民から信頼してもらえるようになり、本来であれば反対される作業時間の延長も快く承諾してもらえるようになった。1年間工事着手が遅れたにも関わらず、先に着工していた隣接工事よりも先に竣工することができた。開発費に請負金額の数%かかり、自己負担となったが、全体を考えるとあまりある効果があった。